校長室だより～燦燦～ №８２５

憧れの授業

2023.8.21

若い頃の話である。見てみたい授業があった。それは、ベテランの先輩の授業だった。憧れの先輩である。その先生は、いつも話すことが違っていた。いつか、チャンスがあれば授業を見てみたい。そう思っていた。

ある年、ついにチャンスがやってきた。ビデオではあったが、その先生の授業を見ることができた。予想はしていたが、そこには、生き生きと発言する生徒の姿があった。ショックだった。自分の授業との差は歴然だった。先生が、少し話すだけで、生徒がどんどん発言していく。生徒の発言によって、授業が進んでいく。まるで、生徒が授業を進めているかのようである。先生はというと、軌道修正というか、いわゆるコーディネートをしているだけである。

なぜこうなるのか。何が違うのか。すぐにわかった。発問が違うのである。生徒が考えたくなるような、話したくなるような、多様な考えが出るような発問だったのである。それに比べて、自分の授業はというと、貧弱そのものだった。目の前の生徒たちに申し訳ない思いがわいてきた。これではいけない。何とかしなければならない。焦った。

それまでの自分は、何かしらの手だては考えていた。どのように授業を進めるかは考えていた。そこに、生徒の思考や反応があったのかというと、あやしい。いつの間にか、教材研究にかける時間が減ってきていた。学習課題や発問を用意はしても、吟味することまではしていなかった。これでは、授業が、平板で、教師主導で、一斉形態が多くなるのは、当たり前だった。

それからは、学習課題を必ず吟味してから、授業に臨むようにした。学習課題をじっくり考えると、発問もついてくるようになった。授業で使う発問を絞り、その構成を考えることで、授業の進め方を考えるようになった。そして、ここはペアで、ここはグループで考えさせたほうがよいなど、形態も考えられるようになった。いつも、ビデオで見た憧れの先輩の授業のイメージがあった。

ようやく、発問のよしあしで授業が変わることがわかってきた。だが、まだまだ発問の精度は高くはなかった。とてもとても生徒の発言で進むような授業にはならなかった。憧れの先輩の壁は高かった。

学期に一つ重点教材、力を入れる教材を決めることにした。その教材で研究授業等を行うとは限らないが、授業記録は残すようにした。アルバムのようなものである。そう決めると、教材研究に力を入れるようになった。すると、学習課題や発問が、今までとは変わってきた。少し、わかってきたような気がした。せっかく生徒がいい発言をしても、それをコーディネートできないのは、教材研究の問題だということもわかってきた。授業者である自分が、教材文をどのくらい読んでいるか、どのように読み取っているかの問題である。

結局、憧れの先輩の授業は、憧れのままである。あの頃の自分にとって、目指すべきもの、モデルとなるものが見つかったことは大きかった。憧れの先輩に感謝である。